

末黒野

すぐろの

1月号 (通巻809号)



権 の 実

小川玉泉

県境を越ゆる渡舟や水の秋
吹き溜まる権の実誰も気に留めず
昼月を銀杏の上に施餓鬼寺
交ごもに桜樹に来ては秋の蟬

虫の音の絶えたり明日の米を研ぐ

大太鼓冷まじ妻の七七忌

天水に泛ぶ銀杏のひと葉かな

尾を立てて枝移る栗鼠木の実降る

秋深む夜を独り酌み越の酒

杉木立深き神域蔦紅葉

大杉の根方つつじの返り花

悼 熊切光子氏

返り花良き選評をもう聞けず

お伊勢まゐり

松本三千夫

秋 闌外宮くる 表参道 火除橋
千木堅魚木玉垣門の秋澄める
白絹の御幌みと 拝す 爽やかに
御廩の神馬不在やそぞろ寒
秋冷内宮の宇治橋渡る神さびて
神苑の松の枝ぶり色変へず
冷やかにこころ禊ぎぬ五十鈴川
鰐口のなき神宮や秋澄める
寄り道の衛士見張所や冷やかに
秋気澄む杜の神鶏見え隠れ
椅子三千明日遷宮の身に入みて
秋時雨垂れを絡めて伊勢うどん

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

雁渡る

黒滝志麻子

とんぼとんぼ原に集まる蜻蛉かな
あきつ飛ぶ予報どほりの良き日和
濡れ縁の手斧けづりや赤とんぼ
むらさきに暮れゆく漁港雁渡る
水音の耳に消えざる秋思かな
木曾の山蒼く連なる良夜かな
秋の暮一湖は深き水湛へ
弧を描く棚田の畦や曼珠沙華
盛り過ぐ萩のトンネル池の風
栗むくやすでに厄年なき齡

白陀師忌

田中臥石

秋の日へつとと滑りぬモノレール
秋の夜の妻髪染めてゐたりけり
朝寒の珈琲ぴぴと湯沸器
柿買うて来ぬ六尺の孫学士
冬瓜のごろりと寝かせ厨口
月明の途をいざよふ白陀師忌
秋郊のキャベツ玉なす古墳塚
秋光の竪穴住居埴輪座す
秋陰の埴輪に洩らす独り言
野分過ぐ空に一朶の雲残し



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



下り鮎 岡田史女

下り鮎しらなみの立ちさわぐなり
十六夜や湯ほてりの身をさらしをり
足下に秋冷いたる座禅堂
塔頭の十月桜人こぼむ
日の暮の川風匂ふ花芒
雀飛んで木斛の実の弾けけり
高層の囲む御苑や松手入

行合ひの空 岡野里子

校塔の黒く泛きたる良夜かな
何も彼も忘れてゐたき良夜かな
枕元に及ぶ月光寝つかれず
溺れじと休まず歩く芒原
露けしや名草醜草へだてなく
片脚を海に入れたり秋の虹
流れゆく雲の遅速や夕野分

露けし 石黒興平

白雲の夜空に著し虫時雨
行合ひの空や墓域のつくつくし
曼珠沙華山の暮色の風動く
観音の伏目に在し酔芙蓉
銀鱗の躍る河口や秋高し
爽籟や空へ帆を張る日本丸
展帆や秋天へ風ふくらませ

走り蕎麦

小倉正穂

雁渡し

菅野日出子

曼珠沙華咲き草臥れて凭れ合ふ
秋の夜の音を絞りて軍歌聴く
亡き父へ先づ酌ませたき新走
花野晴れ己が影までやはらかし
走り蕎麦信濃訛も味のうち
老齡に旅はもう無理雁仰ぐ
風に散る萩や推敲果てもなく

長生きをと子等よりメール敬老日
夫のなきことにもなれて月今宵
閻魔王の眼光いよよ秋夕焼
奪衣婆の剥落はげし蚊の名残
修復の進む大屋根雁渡し
等々力の修験の滝や秋気澄む
溪谷の雑木に宿り猿茸

青ふくべ

加藤静江

冬

隣

菅野蒔子

肖像の子規は横向き青ふくべ
十六夜や葉ずれの音のつりゆく
鳶舞ひて桜紅葉の生まれり
塔頭の門に一本断腸花
新涼や多羅葉に書く我が一句
秋の日を廻す水車や水やせて
展帆の漲るマスト天高し

吾亦紅夫への供花に加へけり
台風の対策やつと八十路の身
稲刈機シートを被せ田に一夜
開拓碑のみが証や紅葉散る
雲は形変へてはちぎれ秋過ぐる
野菊咲く八十路ことなく過せさう
省略も選択肢とす冬隣

青炎集

小川玉泉選



横浜 中野久雄

横浜 河合とき

道間はれ道連れとなる里の秋

幾たびも出でては愛づる月今宵

鳥渡る雲脚早き岬鼻

身に入むや闇に瞬く浦曲の灯

木犀のそこはかと無き香に酔へり

小夜更けて雲の添ひ来る十三夜

横浜 斉藤マキ子

横浜 鈴木芙蓉

新涼や珈琲熱き朝の卓

人文字の濁点の子や天高し

秋草の七つをさがす百花園

江戸の粹残る小径や式部の実

つり舟を湖心に四方の秋深む

精進湖の水なめゆくや銀やんま

デパートに京豆腐買ひ涼新た

風止みてなほ白萩の散る夕べ

初島と大島しかと秋日澄む

爽やかやさりげなく席ゆづる人

初秋刀魚塩は赤穂にこだはりて

断腸花野に笛の音のとこしなへ

横浜 鈴木芙蓉

行きずりの昼の町なか秋祭

さはやかや新築の家の乳母車

読みさしの読書に耽る夜長かな

秋彼岸法話の席の座敷椅子

人絶えし裏参道や秋の暮

大寺の太鼓のひびき秋深む

新宿 稲垣佳子

鼓の音闇の遠のく新能

野外能はじまる前や虫時雨

果てしなき空果てしなき大花野

夕さりや風の棲みつく芒原

風立ちて色なひまざる大花野

鯉跳ねて月影乱す林泉の池

横浜 内藤庫江

神宮の句会に参ず月今宵

海をゆくポンポン船や鱗雲

色変へぬ三保の松原明けの富士

羽衣の松の枝振り新松子

駿河湾望む御廟所秋涼し

家康のお手植と言ひ青みかん

栗原 千葉恵美子

子等帰り草の穂なびき河川敷

台風の来るらし石路を括りけり

ふんだんに秋草挿せる山家かな

四阿に腰掛け秋の声を聴く

訪ぬれば寺はしづかや柿の秋

笹の葉を敷き舞茸を隣家より

横浜 外山節子

磴百段紅葉の中の宮居かな

朝霧や口笛に寄る牧の牛

秋蝶や我も方向音痴なる

熊彫るに鑿一丁やななかまど

子は稀に小鳥朝より来て居りぬ

騎馬戦の騎手は女生徒秋高し

横浜 橋場美篤

刈りどきの稲穂の匂ふ里の谷戸

つぎ目なき空を借り切りうろこ雲

火を噴ける大道芸や鱗雲

二度三度外に出で賞づる月今宵

栗おこはほつくり夫の喜寿を祝ぐ

石畳の路地たもとほり実紫

横浜 占部美弥子

母の忌に行けぬ詫び書く夜長かな

一行を写し間違ひ虫時雨

歳月のすぐる速さや暮の秋

作務僧の礼の深さや苑の秋

真夜の空秋冷到る月明り

波音のほかに音なし暮の秋

耕 土 集

松本三千夫選



茅の香の少し残れる簾巻く

横浜 石井 勇

曼珠沙垂発火点まで達しぬし

立ち止り子へ数えたり鱗雲
鉄骨を組む男どち秋高し

類染めて磨崖仏笑む初紅葉

物干してしばらく眺む鱗雲

秋の朝あかざの杖の折れにけり

柿もぎて青空の張り乱したる

あいつとはもう困めずや夜の長き

稲架幾重並ぶやこも横浜市

秋すだれ小言も共に巻きあぐる

新潟 太田チエ子

刈りたての田面や鷺の悠々と

田終ひの煙ひと筋野辺送り
唐辛子母屋はいつも閉ざされて

検査済のシールの確と今年米

吊るされてただただ赤き唐辛子

マンシヨンの長き影置く刈田かな

畦をゆく宅配便や赤とんぼ

艶やかに寺院の椿実をつけて

覗きみる溪の深さよ赤蜻蛉

数珠玉の未だやはらか雨滴垂れ

横浜 横路 尚子

弦月やスカイツリーの五輪色

ちよほ口のわらべ山車引く浦祭
路地裏の琴の音洩るる秋の暮

折ること多し今年の今日の日

くぐり抜くる萩のトンネル鳥の声

飯桐の実の艶やかや今朝の雨

椋鳥の群の乱舞や夕くるる

遡上せる鮭の一途き旅の朝

秋場所の髪無き力士見上げけり

横浜 山口 登

横須賀 齋藤 眉山

塩川 君子